

だうねす | カトリック山形教会報 ダミアン神父列聖特集

発行日/2009年11月22日 発行責任者/主任司祭 本間研二

120年待った 私たちの聖人



ダミアン神父を知っていますか

1873年、33歳のダミアン神父はハワイ・モロカイ島の、“汚れた”存在として社会から閉め出され家族からも引き離されたハンセン病患者たちの中に身を投じ、16年間の闘いの末、自分も同じ病気になり49歳で死にました。彼はベルギー生まれのカトリック司祭でした。

ローマへ巡礼団、寒河江で記念ミサ祝賀式

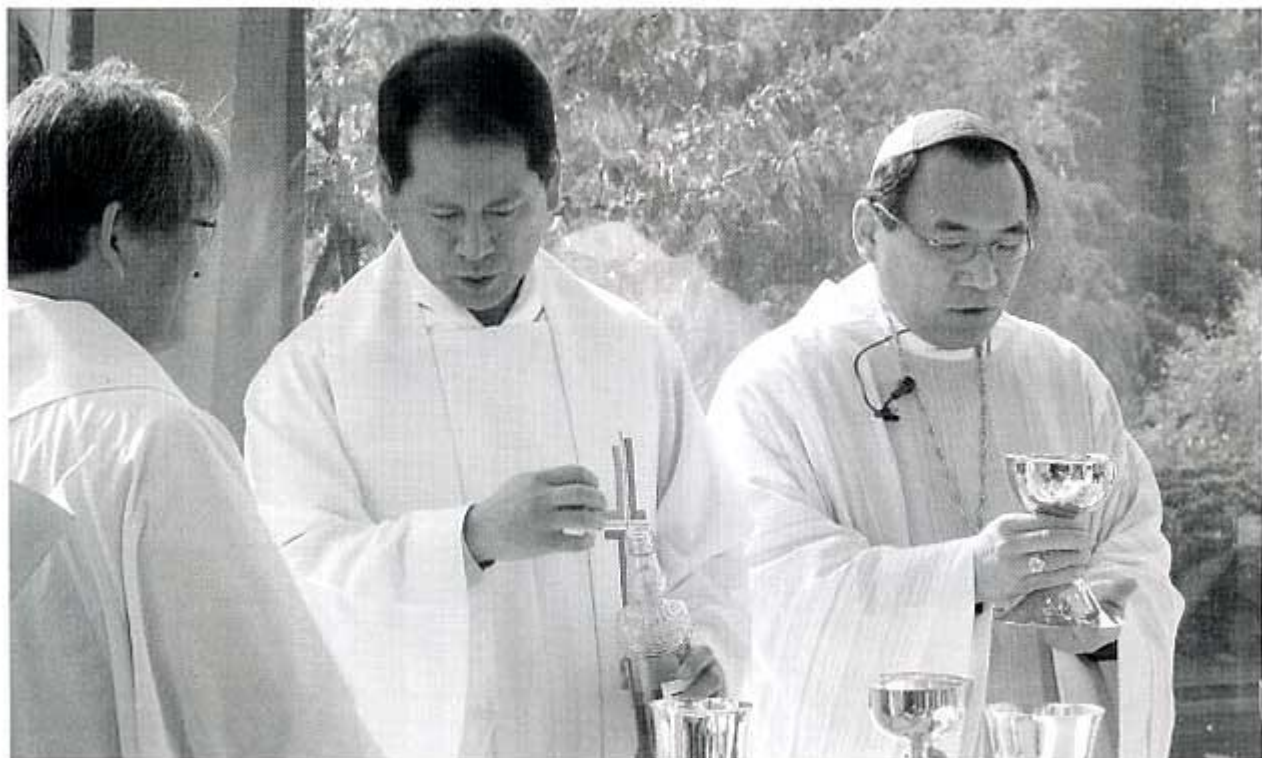
彼の死後120年経った今年10月11日、ローマ教皇ベネディクト16世は、このモロカイ島の殉教者・ダミアン神父を聖人の列に加えました。ダミアン神父は現在茨城県と山形県を司牧するカトリックのミッション(修道会)、イエズス・マリアの聖心会員と同じ会に所属していました。この修道会は1800年にフランスで創立しましたが、自らの会から聖人が出たのはこれが初めてです。戦後、同修道会が日本に司祭を派遣してから60年、茨城県笠間市に本部を置く日本管区メンバーも大喜びです。同会の司牧地山形地区からもローマへ巡礼団を送り、この11月3日には寒河江のホテルで感謝の記念式典を開催しました。

※ダミアン神父をもっと知りたい方はカトリック教会の門をたたいて下さい。写真は1889年1月、死の3ヵ月前、ボロボロになったダミアン神父。ハンセン病のため変形し、ひどく腫れた顔。
イエズス・マリアの聖心会(SS.CC.)日本管区本部 〒309-1738 茨城県笠間市太田町1071

カトリック山形教会(洗礼者聖ヨハネ教会)

〒990-0039 山形市青澄町2丁目11-15 TEL.023-622-3574 FAX.622-3550
ホームページ <http://catholicyamagata.web.fc2.com/>

■ミサ 日曜日(午前9時30分) 土曜日(午前6時30分)
英語ミサ(第1、第2、第3日曜日 午後2時)



喜びと感謝がいっぱい

寒河江でダミアン列聖山形地区記念式

11月3日(火)、山形地区の聖ダミアン神父の列聖感謝ミサと記念祝賀式が寒河江市で行われた。10時半から菊地功司教司式による感謝ミサ(新潟の大澄浩一神父、イエズス・マリアの聖心会の本間研二神父、成田浄司神父、ウイリアム・ドネ

ガン神父、マルチヌス・タリアント神父、サレジオ会の三島心神父が共同司式)に続いて記念式典とパーティーが会場を移して催され、午後3時過ぎに終了した。参加者は山形教会から81人、山形聖マリア幼稚園6人、米沢23人、鶴岡24人、新庄35人、酒田8人、県外7人、サレジオ会8人、川崎ダルク10人。

写真上は記念ミサを司式した(右から)菊地司教、大澄神父、本間神父。下は盛り上がった式典スナップ(11月3日、寒河江のホテルで).....



現代を生き抜く模範に 教区も誇らしい身近な人

菊地司教“一致への闘い”問いかける

小林見子さんによるフルート演奏でミサが始まった。ミサ説教で菊地司教は「ダミアン神父の列聖は新潟教区の誇りであることはいうまでもなく世界の誇りです。10月11日の列聖は修道会の会員の誇りだけでなくこれからの修道会の方向を示す標となるでしょう。教区の中にある修道会の聖人ということで、身近に感じます。現代に生きるキリスト者の生き方の模範となるでしょう。伝記によるとダミアンは奉仕のために頑固な人でした。頑固さがあったからこそ逆境でも愛のために生きました。多くの困難の中で、非難の中で、自分の信仰を生きた現代の殉教者です。ローマの列聖式の時、ホノルルの司教が言っていたことで耳に残っている言葉があります。「わたしたちは、ちょっとしたことで分けて隔てをしてしまうことがある。」「毎日、これは私の問題ではない、関係ないと言って手を差し伸べようとしない。本当に助けを必要としている人を見えないところに隔離している。」私たちの国においても隔離政策を行ってきました。目に見える形での慈善の業を行った隔離政策を反省しなくてはいけない。だれと共に生きているのか、どれだけ真剣に壁を取り除いてきたか。敵意という壁を福音の力によって取り壊す努力をしなければならない。ダミアンは正しく、取り壊す努力の闘いだった。「この神の僕は、苦難の僕となった。闘いは分裂を導くのではなく、一致を」今、一致の時代なのか。目障りなものを取り除くのではなく、一致のために、全ての人を一致するために闘うべきものは何かと問いながら、ミサを捧げたい。」と

話された。

講演やローマの列聖式報告

ミサ後、記念式典では、ドネガン神父がスライドを使って、ダミアン神父の生涯について紹介する基調講演。ベルギーの地獄、生家、墓、モロカイ島、ダミアン神父をカラウババで手助けしたブラザー・ジョゼフ・グットン、マザー・マリアンズなどが登場。講演の後、山形教会の佐久間和宏氏によるローマの列聖式の写真を用いた報告では、バチカン広場が大きく映し出され、溢れる人々の様子は列聖の喜びを伝えていた。日本から60人が参加、(県内からは30人)折り鶴をみやげに持って行ったので、各国の人に喜ばれたようだ。式典の最後はサレジオ会の8人の小神学生によるダミアン神父の生涯の劇「ハワイの勲章」。去る8月神学生が小、中学生サマースクールの手伝いを経て発表されたこの劇が好評だったので、本間神父が招待した。夏よりさらに向上し熱演。記念パーティーではグルクの方々の琉球太鼓、山形教会の山崎好子さんの舞踊、フィリピンの方々のダンス、山形と鶴岡の合同合唱など、盛況な宴だった。

寒波について210人が参加

前日、東北、北海道は今年初の寒波に見舞われ、寒い一日だったが、新潟や新庄など遠方からお祝いに駆けつけた人、山形教会の人たち合わせて210人を超える参加があった。



キリストの愛の輝き

貧しいお年寄りに自宅を開放したシスター・ジーンら ことしの新聖人は10人

聖ダミアン神父の巨大な肖像(タペストリー)は、バチカン聖ペトロ大聖堂の広場正面に掲げられ、左から4人目、右から2人目にあった。10月11日、キリストの愛の輝かしい模範として教皇ベネディクト16世がこの日聖人の列に加えたのは5人だった。さる4月26日列聖の5人を加えると今年の新聖人は10人になる。以下、ダミアン神父を除く10月11日列聖の4人と、4月26日列聖の5人についての紹介である。

・福者マリ・ジーン(ジャンヌ)=Marie De La Croix(JEANNE) Jugan フランス・ブルターニュ地方出身の修道女、1792年の生まれで、お年寄りの保護者。1839年、彼女は自宅を病める人と目の不自由な老婦人のために開放した。時が経つとともに、たくさんのお年寄りが助けを求めて彼女の家にやって来た。しまいには、ほかの婦人たちも集まって来てジーンを助けた。そして今日、「貧しい人々のための小さなシスターの会」は、世界中の貧しい年とった男女1万3千人以上の世話をしている。ジーンは教皇ヨハネパウロ2世によって列福され、1879年に亡くなった。

聖ダミアンの左側に掲げられた肖像の3人は—

・福者ジグムント・フェリンスキー=Zygmunt Szczesny Felinski ポーランド・ワルシャワの先の大司教で「マリアの家族のフランシスコ姉妹会」の創立者である。1822年、現在のウクライナのVolynid近郊の生まれ。彼はロシアへ追放されたが、自由を得て後はウクライナとポーランドの貧しい農民たちの中に入って働いた。彼が亡くなったのは1895年である。

・福者フランシスコ・コル・イ・ギタール=Francisco Coll Y Guitart スペイン・ドミニコ会司祭で、19世紀に「聖母マリアのお告げのドミニコ・シスターの会」を創立した。

・福者ラファエル・アルナイス・バロン=Rafael Arnaiz Baron 20世紀スペイン・トラビストの謙遜で知られたブラザー。

今年の4月26日、教皇ベネディクト16世によって聖人に列せられた5人は次の通り。

・福者アルカンジェロ・タディーニ=Arcangelo Tadini 19世紀末と20世紀の初頭にかけてのイタリア人司教区司祭で、「ナザレの神の家の働くシスターの会」を創立した。彼女たちは工場に入って行って、働いている他の婦人のかたわらに付いて働いた。

・福者ベルナルド・トロメイ=Bernardo Tolomei イタリア人司祭で14世紀初めに「オリーブのベネディクト修道会」を創立した。

・福者ヌーノ・デ・サンタマリア・アルバレス・ペレイラ=

Nuno di Santa Maria Alvares Pereira “ご聖体の修道会”のポルトガル人平修道士。1431年に亡くなる以前は祈りと苦行とマリアへの信心で知られる。

・福者ゲルトルド・コメンソリー=Gertrude Comensoli “ご聖体のシスターの会”をつくった19世紀のイタリア人。彼女は生涯を聖餐と少女たちの教育に捧げた。

・福者カテリーナ・ボルピセリイ=Caterina Volpicelli 19世紀のイタリア人で、「みこころの手作りの会」を創立した。

聖人の素晴らしさをもっと知りたい

以上、ほとんど名前だけの、きわめて簡単な紹介になったが、残念ながら我々はこれら聖人のことを十分に知り得ていない。数百年も昔に活躍した人たちを含めての話だから止むを得ないのかもしれない。が、教皇庁がどのように考えているのか、どう評価したのかなどを知りたい。その肝心の“模範”を、我々は聖人を通して踏的に学ぶことができるのである。新しい全ての聖人の素晴らしさを、もっと詳しく知りたいものである。

10月18日付のカトリック新聞は1面でダミアン神父ら5人の列聖を報じた。しかし一人ひとりを紹介したのではなくダミアン神父に力点がおかれ、ほかの聖人ではスペインで女子修道会を創立したフランシスコ・コル・イ・ギタール神父(ドミニコ会)と20世紀スペインの厳律シトー会(トラビスト)のラファエル・アルナイス・バロン修道士について簡単に触れているだけ。ダミアン神父はまったくの特別扱い。1873年にハワイ・モロカイ島のハンセン病患者の中に身を投じ、1884年には自らハンセン病に侵され1889年49歳で亡くなるまで働き続けたことなど、ダミアン神父についての概略を記したうえ、教皇ベネディクト16世のミサ説教の要旨を次のように伝えている。「ダミアン神父は、ハンセン病患者とともに、自らも1人のハンセン病患者として安らぎを感じていたに違いない。ダミアン神父は私たちの目をハンセン病患者の方々に向け開くように招いている。ダミアン神父は実際の奉仕で愛を示すよう呼び掛けている」と。

新聞によれば、ダミアン神父ら5人の列聖が宣言され、略歴が読み上げられた後、教皇が列聖の教令を荘厳に宣言し、新聖人たちを全教会の聖性の模範としてたたえた。聖人たちの遺物は、大聖堂の祭壇に安置され、聖堂内は「アレキヤ」の歌声であふれた。米国からは数万人の巡礼者が、ハワイのハンセン病患者と奉仕者も、巡礼団を組織してやって来た。大聖堂に収まりきらず、約4万人の巡礼者がサンピエトロ広場に設置された大スクリーンで列聖式を見守った。



世界中から数万人の巡礼団 山形教会からも列聖式巡礼に11人が参加

ダミアン神父列聖式の巡礼に参加して

戸田和助

モロカイ島のダミアン神父の足跡を、二度ほど訪ねたが、彼の苦闘が認められ、福者に上げられ、このたび列聖されるに当たり、是非参加したいと思い、年も省みず申し込みました。ローマに到着した翌日、朝早く起きてアッシジの聖フランシスコ大聖堂でミサの後、谷口神父の案内で町を隔無く案内して下さる。小さな町ですが坂道なので若い方についていくのが精一杯。前回来た時泊まったホテルの前を通って思い出したクララ教会は初めて拝観した。夜はサンタマリア・バジリカ教会で聖心会の前夜祭が盛大に行われた。ダミアン神父ゆかりの品が祭壇に供えられた。飯島さんが大事に持っていった聖心会のシンボルマークの額も飾られた。世界中から何千人もの人が集う前夜祭が終わって夕食に向かうバスに戻ろうとした時、皆とはぐれてしまった。待ち合わせの場所で待っていたが誰も出てこない。30分程待ったが、もう通る人もまばらになった。皆は行ってしまったようだ。はてどうしよう。夕食は何処のレストランか解らない。ホテルに帰るしかない。タクシーを拾えるところまで出ようと通りまで出たら、問もなく来た。英語が出来るかと聞いたら、NOと言う。でも英語は通じる。ホテルの名前を言っても解らない。“旅のしおり”を見せたらOKとうなずく。

30分位走ってホテルに着いた。何か食べようかと食堂に行ったら、今日もう終わり。部屋へ戻ったら電話のベルが鳴った。添乗員のガイドさんだ。たぶんホテルに戻っているだろうと掛けてくれた。大変心配をかけて申し訳ないとお詫びをする。彼女も安心したようだ。

翌11日、いよいよ列聖式のハイライト。ほかほかと暖かい秋日和。バチカン広場は何万人の参列者であふれた。式が進むにつれて疲れが出たのかとうとうと眠くなる。ふと気が付くと隣のシスターの肩にもたれて眠っていた。大変恐縮して小さくなっていたら帰り際、笑顔で握手をしてくれた。つまずいて転んで膝を擦り剥いては皆さんに迷惑をかけ通し。年寄りの私をご親切に手を引いていただき、大変お世話になり、助けていただいたが、スペインから来た82歳のお婆ちゃんが私に会いたいと言って一緒に写真を撮りたいと言う。私が日本から来た最高齢者と言うことらしい。外国では年を取るといことは価値のあることらしい。

バス2台に分乗して巡礼の旅をした仲間の名簿が無いので作って下さるようお願いしたら、個人情報プライバシーに関わるということで作っていただけなかった。お世話になった方々にお礼もままならない。一則一会の有難い巡礼の旅でした。合掌。

聖心会 ダミアン神父 ローマで列聖式

2009.10.11 モロカイ島の殉教者、死後120年経って聖人に

教皇ベネディクト16世は、2009年10月11日、バチカンの聖ペトロ大聖堂でミサを捧げられ、この中で5人の列聖を宣言された。

ミサには聖人たちのゆかりの地から多くの巡礼団が参列し、大聖堂に入りきれなかった人々が聖ペトロ広場を埋めた。

教皇はミサの説教で、「わたしに従いなさい」(マルコ10,21)というイエスの愛の呼びかけに真摯な愛で応えた聖人たちの生き方を見つめるようにと招かれた。

イエスは弟子たちにその命のすべてを人間的な打算なしに、神への完全な信頼のうちに捧げるよう望まれ、聖人たちはこの難しい要求に対し、謙遜な従順をもって、十字架につけられ復活したキリストに続く者となったと教皇は強調。聖人たちの信仰に基づく考え方は時に人間的には理解されなかったが、彼らの中心にあったのは自分自身ではなく、福音を生きたことそのものであったと話された。

この日、列聖された5人の中で、特にハワイでハンセン病患者の救済に尽力し、自らも同じ病を発症し患者たちの真の友となって亡くなったダミアン・デ・ブースター神父は、「モロカイの聖者」として日本でも知られ、大きな尊敬を集めてきた。

教皇は式中、ダミアン神父の生涯を次のように振り返られた。「ダミアン神父は、1863年、23歳で故郷フランドル地方を離れ、世界の別の場所に福音を告げるため、ハワイ島に向かいました。彼の宣教活動は自身に大きな喜びを与え、それは愛の業となって花開きました。恐れやためらいにも関わらず、彼はモロカイ島に置き去られ誰からも顧みられないハンセン病患者たちへの奉仕を決意しました。そして、病気に苦しむ患者たちと接しました。彼は患者たちとの生活を、家のように感じました。み言葉の奉仕者は、こうして苦しむ人々の奉仕者となり、晩年の4年間は患者の中の患者となりました。キリストに従うために、ダミアン神父は自分の故郷と別れただけでなく、自分自身の健康までも捧げたのです。それゆえ、彼はイエスの言うように「永遠の命」(マルコ10,30)を受けたのです。」

ダミアン神父の列聖は、今年日本での宣教60年を迎えたイエズス・マリアの聖心会の関係者はじめ、多くの信者たちにも喜びをもたらした。

(文章/バチカン放送局ホームページより)



1 上から大聖堂正面に掲げられたダミアン神父の肖像、広場に設置された大スクリーンが聖堂内で行われる列聖式の様子を映し出す。防弾ガラスで覆われた車で、広場に現れた教皇。一時閉鎖されたサンピエトロ広場は各国からの巡礼団によって埋め尽くされた。



内なる魂の美しさを見よ

聖人になってもダミアンはダミアンだ

サンピエトロ広場に掲げられた5人の聖人のタペストリーを見て思ったことがある。シスター・ジーンは別にして、ダミアンを除く他の3人はいずれも美しく輝くポートレートで生まれながらの聖人、といった印象を受ける。対照的にダミアン神父は苦勞に苦勞を重ね、あら

ゆる地上の辛酸を嘗めてきた質素で無骨な男まる出しである。それどころか顔も手も、いくらか修正は施してあるにせよ、ハンセン病のため腫れ上がっているのは隠しようもない。そのはずだ、この肖像は彼の死の3ヵ月前(1889年1月)に撮影された写真を基にして

いるのだから。ボサボサのあごひげが鬨い終えたライオンを連想させる。このあと、兄のバンフィルに「病気が重くても幸せです」と、ロンドンの友人には「もうすぐゴルゴダの頂上へ」と別れの手紙を出している。

ダミアン神父には世俗の物差しは通用しない。暗れがましい地上最高の舞台にありながら、ダミアンはやはりダミアンだった。「アレヤ」の大合唱の中でも、彼らしくそこに立っていた。

神は時に、ただの人、普通の人にとんでもない大役を与える。彼がそれをやり遂げた時、市鐘は世界に鳴り響き、新聞は賛辞を惜しまなかった。聖心会総長は直ちに列聖のための調査を求めた。しかし地元ホノルルの聖心会が嫌がった。ダミアン列聖への働きか

けはステートでつまづいた。ダミアン聖人化への道は多くの困難を作った。

命令を聞かずに長上を怒らせ、しばしば修道会の会則を破り、神が望むことと信じればあえて禁を犯したからか。粗野で強情で、と嫌われたが、それが出来たのは彼が決して地上の人々からの賞賛を求めなかったからだ。むしろダミアンは謙虚な人だった。人は見かけじゃない。

没後120年経って、「聖人」といわれ、一番びっくりしているのはダミアン本人だろう。生きている時に聖人になるなんて1度も考えたことはなかったはずだからだ。内なる魂の美しさを神はダミアンを通して示された。

ラテラノ聖ヨハネ大聖堂(旧教皇庁)における10月12日の列聖感謝式典。424年前、1585年4月10日のグレゴリオ13世の死去に伴う、シクストゥス5世の即位戴冠式(5月1日)に続く可敬座席儀式(5月5日の日曜日)もここで行われた。その日の主賓は地球の果の果て、異文明の地からやって来た日本の4人の少年たち(天正遣欧使節)であった。彼らの姿はローマが世界と語られていることを端的に告げた。馬上の少年使節たちは教皇に従って長い長い行列の中心にいた。行列はバチカンのサンピエトロ広場を出てローマ市中を横切り、市民歓呼の中を長い時間をかけて壮大なラテラノ大聖堂へ向かった。バチカンでのダミアン神父列聖の翌日、ラテラノ大聖堂の感謝式典に臨んだ日本からの巡礼団は、400年の待空を越えて、同じ歴史の舞台に立っていたのである。



聖人の、生前の苦勞をしのび祈る

ダミアン神父列聖式の巡礼に参加して

佐久間典子

列聖式に参列できる機会はまたとなく、娘の小学校がミッションスクールでもあり学校側の理解が得られたことから、ぜひ娘にはバチカンをも自分の目で見て感じてもらいたくて、夫には仕事を休んでもらってまで今回のツアーには一家3人で参加させていただきました。

われわれ一家は受洗からまだ間もなく、信徒としてみなさまの前で云々できる立場ではありません。しかし、私がこの列聖式の最中に考えていたことは、「いま、このサンピエトロ広場に世界中から集った人々の「幸福な」にぎわいを、今回列聖された聖人たちは天の国でどう見ているだろうか?」ということでした。

列聖式では単に列聖そのものをお祝いするだけではなく、それに至った聖人たちの苦勞を思い起したうえで慰労したときにはじめて、聖人たちは喜んでくれるのではないかな、と思いながらお祈りして帰ってきました。



バチカン小聖堂での参加者ミサ。左はワルヨ、マクドナ、本間、ドネガンの各イエズス・マリアの聖心会日本地区司祭。右は本間神父と佐久間典希さん

娘もツアー内での参加者ミサで侍者をさせていただく光榮に預かり、今回のツアーはわれわれ一家にとって一生の思い出となりました。



私マザーテレサ、あなたダミアンよ 劇を通し熱い感動

山形サマースクールに参加して

シスター宮澤直子

神の愛の宣教者会の創立者で1979年にノーベル平和賞を受賞したマザーテレサはインド、エチオピア、イエメン、タンザニアなどでせひハンセン病者の守護聖人がほしいと教皇に懇願し、ダミアン列聖を強力に擁護しました。そのマザーの生涯を決定づけたカギはダミアン神父だったといわれています。聖人ダミアンはとても身近で、ひよっとしたらボクもやれるかもしれない、と思わせるところがある。マザーテレサとダミアンは現代に最もふさわしい新しい時代が求める聖人です。“マザーテレサとダミアン”、この取り合わせは絶妙。山形教会の2009年サマースクールを「召命」をテーマに指導して下さったサレジオ会グループの一員で「サレジオ・シスターズ」のシスター宮澤直子から原稿をいただいた。

『召命～耳をすまそう、 イエスさまの声に～』

サマースクール2009

「こんにちは、キャンプ楽しみだね。」「どの教会から来たの?」「〇〇教会…」などと会話を交わし、少し緊張と期待を込めた面持ちでバスに乗る子どもたち。山形のそれぞれの教会から幼稚園児～中学生の12名の子どもたちが山形教会に集合し、目的地である蔵王高原へと出発しました。今回のサマースクールには、私たちサレジオ会、サレジオ・シスターズ、宮崎カリタス修道女会(みなサレジオファミリー)も参加させていただき、共に楽しいひとときを過ごさせていただきました。

本間神父様が鶴岡教会にいらっしゃった2年前、サレジオ会とサレジオ・シスターズはすでにサマースクールに参加させていただいていました。そのことがきっかけで、今回も私たちの修道会の志願者(中高生、社会人)と共にリーダーをさせていただきました。「召命～耳をすまそう、イエスさまの声に～」をテーマとし、一人ひとりに神さまの呼びかけがあること、その中に司祭や修道者の召命もあることなどを紹介し、現代の生きた証し人であったマザーテレサや今秋列聖されるダミアン神父様の生き方を学び、劇に表現する活動を主に行いました。小学生高学年～中学生の男子グループはダミアン神父様の話を聞き、何度も練習を重ね、発表を行った最終日のミサでは、ミサに参加していた方々の心を打ち、感動を与えていました。私自身、彼らの演技に心から感動し、熱い思いが込み上げてきたことを覚えています。一方、幼稚園児～小学校低学年のグループは、マザーテレサについて学びましたが、小さな子ですでにマザーテレサのことを知っている子が多く、マザーテレサのどういうところを劇で表したいかを探ねたところ、自分たちが子どもだから子どもが出てくる学校の場面が良い

と意見を出した子がいました。そこで、路上に見捨てられた人々を救う場面などというよりは、貧しい子どもたちの教育にも心を注いでいたマザーの姿を中心に描くことになり、練習を行い発表しました。どの子も一生懸命練習していました。発表では、子どもたちの純粋な姿、かわいらしさに目を引きつけられた人も多かったと思います。

また2日目は、蔵王高原の「ドッコ沼」にハイキングに出かけ、皆で交流を深めながら大自然の中で、自然の美しさに触れながら楽しいひとときを過ごしました。そしてその夜には「光の集い」を行い、このサマースクールを通して感じたこと、これからの決心を分かち合い、各自キャンドルと共にその決心を捧げました。幼稚園児の子もしっかりと自分の決心を話したことは感心しました。出会って間もない子どもたちですが、キャンドルに照らされた一人ひとりの顔と純粋で素朴なその姿を見ながら、何か懐かしい“ひと”の温かさ、清らかさに心を打たれ一人ひとりのために心を込めて祈りを捧げました。この出会いに心から感謝しました。

最終日には、山形教会に戻り教会の方々と共に祈りながら、劇の発表を行い、最後に感想を書いて今年のサマースクールは閉校となりました。参加した子どもたちの様子やサマースクールの日数を増やして欲しいと願ってきた子もいたことから、子どもたちにとっても楽しく、実りのあることが多かったようです。6月末の下見から当日に至るまで、本間神父様をはじめ、マルティンス神父様、教会の方々が私たちに対して多くのご配慮下さったことに感謝しております。参加した子どもたちが神さまが一人ひとりに呼びかけている“その声”を聞き、喜びのうちに自分に与えられた召命を生きていくことができますようお祈りしています。

皆様の上に神さまの豊かな祝福がありますように…

感謝のうちに

ダミアン神父列聖によせて「わたしのダミアン」 — イエズス・マリアの聖心会神父 —

■ダミアン神父は、「わたしたちハンセン病患者は…」ということばで毎朝のミサの説教を始めていたそうですが、明らかに自分自身が病気に感染したと分かった後、「今、私は、ほんとうの意味で、わたしたちハンセン病患者は、と言えます」と言ったということです。

モロカイ島に行った時から、自分自身をあくまでも患者達の仲間、友として生涯を捧げた彼の心が響いてくる最も好きなことばです。(友部本部 山田神父)



■モロカイ島の殉教者…この物語を一度聞けば、決して忘れることはない。

真に特別な人物の人生に対する私の思いは、このように表現されるでしょう。

10月9日に取手教会の7人の信徒と共にローマへ向けて日本を出発します。それは本当に特別なやり方でイエズス・マリアの聖心会の司祭であるダミアン神父の永遠の命を祝うためなのです。10月11日、その時、ベネディクト16世は福者ダミアンを聖人ダミアンと宣言するのです。

私が、ダミアン神父について初めて知ったのは、ニューヨーク州パファローの中学時代でした。その話を聞いて私は当惑させられてしまいました。もっとも恐れられた病で苦しんでいる人々に、すっかり身を捧げるといふ彼の神聖な行為は真実だとはどうてい信じられないことだったのです。しかし私にとってダミアン神父はそれ以上なのです。彼はモロカイ島の殉教者であり、私にとってはモロカイ島の何もかも表しているようになりました。ダミアンはおびえた人々に苦しめられたわけではなく、モロカイ島全ての人々の不安や醜い様相の病に苦しめられたのです。

私がイエズス・マリアの聖心会に入る準備をしていた時、ダミアンが会の一員であると知り、どんなに喜んだことでしょうか。イエズス・マリアの聖心会の会員にとってなんと素晴らしい手本であり、目標でしょう。

私がかつて見たダミアン神父のスライドの中でマハトマ・ガンジーがダミアンについて尋ねられていました。ガンジーの話した正確な言葉は覚えていませんが、その意味は覚えています。ガンジーは多くの言葉を使って言いました。ダミアンが自分の人生をとて不幸な人々に捧げるように導かれた精神を私たちはみつけないければなりません… アーメン。アーメン。(取手教会 マクドナ神父)



■ダミアン神父は、多くの人々を神様のもとに導く磁石のような方です。(水戸教会 ビッファー神父)



■ダミアン神父の神への愛、また人々特に恵まれない人々、見捨てられた人々への愛は、私たち司祭が歩むべき道であり模範です。そのような司祭になりたい。(友部修道院 小林神父)



■ダミアン神父様の伝記を読んだのは、神学生になって間もなくでした。読後感は「ウー、自分にはこのような生き方は絶対にできない。ダミアン神父様は特別な人だ」でした。アメリカへ行く時と帰る時、二度モロカイ島へ行きました。患者さんた

ちやシスターたちともお会いし、ミサにもあずかりました。ダミアン神父様が、とても身近に感じられました。しかし、「自分にはこのような働きはできない」という気持ちは同じでした。三年前、病気になり、今も通院しています。入院した時、不思議なことにダミアン神父様の名をと覚えていたのです。今、何人かの病気の方々のためにお祈りを頼まれています。その人たちのためにも、毎日ダミアン神父様の名をと覚えています。ダミアン神父様の生き方から、一つでも好きなことを学び、自分の生き方の中で、霊的なヒントとして生きて行くことができると思っています。(友部修道院 川又神父)



■聖ダミアンの生涯は私にとって最も大切なことはゆるしの秘跡を受ける「勇気」をいただくことです。それは神のご意志によって得られることです。ゆるしの秘跡は聖人の道につながることに私は信じております。(つくば教会 ワルヨ神父)



■この世で貧しく、忘れられ、見捨てられようとしていた人々に、神の愛を注ぎ続けられた。(那珂教会・日立教会 楠 宗真)



■私が初めてダミアン神父のことを知ったのは、アイルランドの高校にいた時でした。イエズス・マリアの聖心会の司祭オウェン・ゴッドウィン神父が我々の学校にやって来て召命について話したのです。ゴッドウィン神父は話の中で彼の修道会の会員であるダミアン神父について、彼が福音のために自らの生涯を捧げるに至った道を話しました。

幾つかの理由で私は彼の話に深く心を打たれました。またダミアンについての何かが私の好奇心をそそりました。さらにゴッドウィン神父の態度そのものがとても率直で楽しそうにみえました。

それから程なく私は同じこの修道会にはいる決心をしました。それは1963年のことです。その時以来、私はダミアン神父が我々の全てにとって、インスピレーションの絶えざる源になっていることが分かりました。ダミアン神父のユニークさは、彼がありふれた農家の出であるにもかかわらず、神と人々のために途方もなく素晴らしいことをやり遂げたということです。

(下館教会 マーフィー神父)



■ D…Determined A…Amiable M…Man of God I…Inspiring E…Energetic N…Nurturing (水戸教会 トニー神父)



■私がフィリピンでライ患者に御聖体を授ける時、特別にダミアン神父さまのインスピレーションをいただき勇気をだして授けることができました。あの時は本当にすばらしい勇気と愛の心をもって授けることができ今でも心から感謝しています。彼の宣教熱心さに心をうたれました。

(友部修道院 プラザー中沢)



■フィリピンでは、列聖式のために9日間のノベナをして準備しました。当日の11日は、パゴシランのみこころ会の教会で500人ほどが集まり、地元の司教様主司式でミサをささげまし

た。21日には、もうひとつの感謝ミサがあり、神学校のある地区の司教様主司式で、15名ほどの司祭、他の修道会の修道者や信徒たち300人くらい集まりました。ダミアン神父のおかげで、このように多くの人々が世界中でみことばの祭壇とミサの祭壇を囲むことができました。みことばとミサを大切にしたいダミアン神父からの贈り物、これからも大切にしていきたいです。

(フィリピン ピアス神父)



■聖ダミアン神父がモロカイ島で活躍していた頃、当時のハワイ王朝のカラカウア王の妹で、後に最後の女王となるリリウオカラニの訪問を受けました。そこで、王朝からの勲章を差し出されるのですが、彼は辞退しました。今回の列聖も、もし本人がそこにいたら辞退したかもしれません。いずれにしても、彼が聖人になったのは、けっして一人の力でなかったのではなく、彼と共に過ごしたハンセン病患者の仲間がいたからです。そのことを、いつも忘れないでいたいと思います。

(フィリピン 千原神父)



■神である父のひとり子が人となってこの世に現れ、いのちを捧げられたと同じように、家族や社会から捨てられた人々のために数多い困難や中傷、孤独などを耐え忍び、ついにはその患者の一人となって生涯を閉じた英雄中の英雄…まねの出来ないスーパーマン・セント。と同時に、これまでの聖人伝に出てくるような聖人でない聖人という意味では非常に身近な存在。現代の殉教者。

(米沢教会 成田神父)



■私がまだ高校生の時、ある新聞記事を何度も読んだことを思い出します。それはアイルランド出身のパトリック・ローガン神父の書かれたもので、彼はダミアン神父が建設したモロカイ島のカラウババで主任司祭を務めておられ、ダミアン神父の働きを伝えてありました。私は、このモロカイのダミアン神父に強く心を引き付けられ、それで、彼と同じ「イエズス・マリアの聖心会」に入会する決心をしたのです。

よくダミアン神父の活動に対して、規則を守らず、石頭の頑固者で、自分の野心が強い人という非難があります。しかし、

そうした悪口を言う人は、誰ひとり彼の働いたカラウババの現場に足を踏み入れたことのない人達でした。ダミアン神父はモロカイの病人を守るため、そして彼自身が島の人々と同じ病に冒されるまで懸命に働きました。そして命尽きるまで彼らのために生き、そして亡くなられたのです。

ダミアン神父は私のヒーローです。ダミアン神父さま、どうぞ私のために祈ってください。あなたがなされたように、私も思えない人に、世の中から忘れ去られた人々のために、あなたと同じ心で働くことができますようにお祈り下さい。

(鶴岡教会 ドネガン神父)



■私はスマトラ島で働いたときに初めてダミアン神父についての本を読みました。それは1993年の7月の末くらいだった。その時に私はどんな司祭かどんな修道会かを定める前だった。

私はダミアン神父についての本を読んでから、ダミアン神父の福音の生活の生き方や福音の宣教の働き方や信仰生活などが分かりました。そこで私は「この同じ修道会に入りたい」と思い始めました。しかし私はダミアン神父の修道会が分かりませんでした。しかし私は1年間の間に不安な気持ちを感じながら会った司祭や修道者の方々に聞き始めました。

モロカイの聖ダミアンの生活の模範はすべての人の心や世界の目と耳と心を敲き、聞いてくれます。私はダミアン神父の模範のために私の心も目も耳も優しくして、聞いて神の呼びかけを聞いています。

モロカイの聖ダミアンは私の聖人、私たちの聖人、皆の聖人、全教会の皆さんの聖人、ヒューマニズムの聖人だ。

(山形教会 マルティヌス神父)



■ダミアン神父様は、私たちに、キリストの姿を示されました。心から感謝いたします。ダミアン神父の生涯をつらぬいていたのは、愚かしいほどに一途な神への愛に他ならない。だが、ダミアン神父は神の愛を知っていたというだけではない。神の愛を生き抜いたのだ。同じその愛を生き抜く自信はない。しかし、ダミアン神父の生き様から目を反らしてはいけないと思う。信仰は生きることだから。

(山形教会 本間神父)

ダミアン神父関連年譜

ヨーロッパ時代

- 1840年 1月3日 ベルギー、ブラバント州の農村、トレムローにあるデ・ブースター家で、フランスとカタリナ夫婦の7番目の子供が生まれ、代父の名(Joseph Goovaerts)にちなんでヨゼフと名付けられた。後のダミアン神父である。
- 1856年 5月15日 18歳のヨゼフはエノー州ブレン・ル・コンテの町にある学校の寄宿生になった。フランス語をマスターするため、それが家業の一部としての穀物取引に役立つだろう、という父親の考えによるものだった。
- 7月17日 ヨゼフは母親に手紙を書き、兄のバンフィル(オーグスト)に続くことはできないのか、と初めて修道者としての道に進みたい意思を訴えた。この年の夏、ヨゼフはルーベンの聖心会修道院の中で兄と一緒にフランス語を勉強して過ごし、秋にブレン・ル・コンテへ帰った。ヨゼフはこの領ラビスト修道院を希望していたが、兄バンフィルのすすめで聖心会に入りたいと思うようになった。
- 12月25日 ヨゼフは母親に手紙を書き「自分を止めないでほしい、神の召し出しに従うのだから決してあなた方を悲しませることはない」と、愛むらぬ決心を述べた。
- 1859年 1月1日 ヨゼフ19歳の誕生日を目前に、彼はブレン・ル・コンテからトレムローには帰らず、直接ルーベンの兄のもとへ行き、そこで父と会った。父はヨゼフとバンフィルを修道院に残して帰った。兄バンフィルの手苦通リルーベンのペンセラス修道院長にも会い、聖職志願者としてヨゼフは聖心会に受け入れられた。しかしラテン語とギリシア語の教育を受けていなかったので修道者の身分としては平俗道士入り、まずは聖職隊員となった。

- 2月2日 ヨゼフは聖服をまとい(着衣式)、修道名をダミアンと改めた。この頃、ダミアンは決められた仕事のほか見聞の指導でラテン語の勉強をはじめ、6ヵ月後にはコルネリウス・ネボス(Cornelius Nepos)を副座に据えるほどになっていた。修道院長もその努力を認めダミアンもようやく司祭候補生の仲間入りできた。そして、聖心会の司祭としての生き方を学ぶため18ヵ月の修練に入った。
- 1860年 10月7日 ハリ・ビクス通りにある聖心会の本部で清貧、貞潔、従順の3つの誓約を立てた。冷たい雨の降る日だった。ダミアンは1年間そこにどどまりスコラ哲学を学び、ラテン語とギリシア語の勉強を続けた。
- この年の始め頃、ダミアンの兄バンフィルが病に倒れる。聖心会はハワイのメグレ執事代理司教の要請で6人の神父とブラザー、10人のシスターをオセアニアへ派遣することにし、バンフィルをそのメンバーに加えた。
- 1863年 9月19日 ダミアンはマリナー(メット・エレン)の神学校で下級聖品を受ける。彼はチフスで駆けなくなった兄に代わって派遣団に加えてほしいと直接修道会本部に申請、許可される。
- 10月 ダミアン神父は送別礼として知られるモンテーフ(シュケルンブフェール)の聖母寺院で母と義妹に会い、最後の別れをする。
- 11月2日 ブレーマー・ハーベンで乗船。一行は16人の宣教師と16人の水夫、それに船長夫婦とその従兄弟の合計35人。船は3本マストの蒸船、ウッド号(R.W.Wood)でハワイ王座旗を飾っていた。途中、予定の寄港地はなかった。
- 1864年 3月19日 ハワイ群島が視界に現れる。マウイ島、モロカイ島の沖を過ぎてオアフ島へ。午後9時にダイアモンドヘッドを回り、ホノルルに着いたのは夜中、ヨーロッパの港を出てから138日間の航海であった。上陸は翌20日になったようだ。

た。2日には、もうひとつの感謝ミサがあり、神学校のある地区の司教様主司式で、15名ほどの司祭、他の修道会の修道者や信徒たち300人くらい集まりました。ダミアン神父のおかげで、このように多くの人々が世界中でみことばの祭壇とミサの祭壇を囲むことができました。みことばとミサを大切にしたいダミアン神父からの贈り物、これからも大切にしていきたいです。

(フィリピン ビアス神父)

◆◆◆
 ■聖ダミアン神父がモロカイ島で活躍していた頃、当時のハワイ王朝のカラウア王の妹で、後に最後の女王となるリリウオカラニの訪問を受けました。そこで、王朝からの勲章を差し出されるのですが、彼は辞退しました。今回の列聖も、もし本人がそこにいたら辞退したかもしれません。いずれにしても、彼が聖人になったのは、けっして一人の方でなかったのではなく、彼と共に道ごしたハンセン病患者の仲間がいたからですね。そのことを、いつも忘れたいと思います。

(フィリピン 千原神父)

◆◆◆
 ■神である父のひとり子が人となってこの世に現れ、いのちを捧げられたと同じように、家族や社会から捨てられた人々のために数多い困難や中傷、孤独などを耐え忍び、ついにはその患者の一人となって生涯を閉じた英雄中の英雄…まねの出来ないスーパーマンセント。と同時に、これまでの聖人伝に出てくるような聖人でない聖人という意味では非常に身近な存在。現代の殉教者。

(米沢教会 成田神父)

◆◆◆
 ■私がまだ高校生の時、ある新聞記事を何度も読んだことを思い出します。それはアイルランド出身のパトリック・ローガン神父の書かれたもので、彼はダミアン神父が建設したモロカイ島のカラウババで主任司祭を務めておられ、ダミアン神父の働きを伝えてありました。私は、このモロカイのダミアン神父に強く心を引き付けられ、それで、彼と同じ「イエズス・マリアの聖心会」に入会する決心をしたのです。

よくダミアン神父の活動に対して、規則を守らず、石頭の頑固者で、自分の野心が強い人という非難があります。しかし、

そうした悪口を言う人は、誰ひとり彼の働いたカラウババの現場に足を踏み入れたことのない人達でした。ダミアン神父はモロカイの病人を守るため、そして彼自身が島の人々と同じ病に冒されるまで懸命に働きました。そして命尽きるまで彼らのために生き、そして亡くなられたのです。

ダミアン神父は私のヒーローです。ダミアン神父さま、どうぞ私のために祈ってください。あなたがなされたように、私も思えない人に、世の中から忘れ去られた人々のために、あなたと同じ心で働くことができますようにお祈り下さい。

(鶴岡教会 ドネガン神父)

◆◆◆
 ■私はスマトラ島で働いたときに初めてダミアン神父についての本を読みました。それは1993年の7月の末ぐらいだった。その時に私はどんな司祭かどんな修道会かを決める前だった。

私はダミアン神父についての本を読んでから、ダミアン神父の福音の生活の生き方や福音の宣教の働き方や信仰生活などが分かりました。そこで私は「この同じ修道会に入りたい」と思い始めました。しかし私はダミアン神父の修道会が分かりませんでした。しかし私は1年間の間に不安な気持ちを感じながら会った司祭や修道者の方々に聞き始めました。

モロカイの聖ダミアンの生活の模範はすべての人の心や世界の目と耳と心を敲き、聞いてくれます。私はダミアン神父の模範のために私の心も目も耳も優しくして、聞いて神の呼びかけを聞いています。

モロカイの聖ダミアンは私の聖人、私たちの聖人、皆の聖人、全教会の皆さんの聖人、ヒューマンイズムの聖人だ。

(山形教会 マルティヌス神父)

◆◆◆
 ■ダミアン神父様は、私たちに、キリストの姿を示されました。心から感謝いたします。ダミアン神父の生涯をつらぬいていたのは、愚かしいほどに一途な神への愛に他ならない。だが、ダミアン神父は神の愛を知っていたというだけではない。神の愛を生き抜いたのだ。同じその愛を生き抜く自信はない。しかし、ダミアン神父の生き様から目を反らしてはいけなと思う。信仰は生きることだから。

(山形教会 本間神父)

ダミアン神父関連年譜

ヨーロッパ時代

- 1840年 1月3日 ベルギー、ブラバント州の農村、トレムローにあるア・ブスター家で、フランスとカリナ夫婦の7番目の子供が生まれ、代父の名(Joseph Goovaerts)にちなんでヨゼフと名付けられた。後のダミアン神父である。
- 1858年 5月15日 18歳のヨゼフはエイノー州ブレム・コンテの町にある学校の寄宿生になった。フランス語をマスターするため、それが言葉の一部としての教科書に役立つだろう、という父親の考えによるものだった。
- 7月17日 ヨゼフは両親に手紙を書き、兄のバンフィル(オグスト)に書くことはできないのか、と初めて修道者としての道に進みたい決意を訴えた。この年の夏、ヨゼフはルーベンの聖心会修道院の中で兄と一緒にフランス語を勉強して過ごし、秋にブレム・コンテへ帰った。ヨゼフはこの外ラビスト修道院を希望していたが、兄バンフィルのすすめで聖心会に入りたいと思うようになった。
- 12月25日 ヨゼフは両親に手紙を書き「自分を止めないでほしい、神の召し出しに従うのだから決してあなた方を悲しませることはない」と、愛を込めて決心を述べた。
- 1859年 1月1日 ヨゼフ19歳の誕生日を目前に、彼はブレム・コンテからトレムローには帰らず、直轄ルーベンの兄のもとへ行き、そこで父と会った。父はヨゼフとバンフィルを修道院に残して帰った。兄バンフィルの手書通りルーベンのペンセラス修道院長にも会い、聖志者としてヨゼフは聖心会に受け入れられた。しかしラテン語とギリシア語の教育を受けていなかったため修道者の身分としては平修士で入り、まずは掃蕩員となった。

- 2月2日 ヨゼフは聖服をまとい(着衣式)、他道名をダミアンと改めた。この頃、ダミアンは決められた仕事のはか兄バンフィルの指導でラテン語の勉強を始め、6ヵ月後にはコルネリウス・ネボス(Cornelius Nepos)を座席に据えるようになっていた。修道院長もその努力を認めダミアンもようやく司祭候補生の仲間入りできた。そして、聖心会の司祭としての生き方を学ぶため18ヵ月の修練に入った。
- 1860年 10月7日 パリ・ピクブス通りにある聖心会の本部で清貧、貞潔、従順の3つの誓願を立てた。冷たい雨の日だった。ダミアンは1年間そこにどどリスコフ哲学を学び、ラテン語とギリシア語の勉強を続けた。この年の始め頃、ダミアンの兄バンフィルが病で逝く。聖心会はハワイのメグレ教区代理司教の要請で6人の神父とブラザー、10人のシスターをオセアニアへ派遣することにし、バンフィルをそのメンバーに加えた。
- 1863年 9月19日 ダミアンはマリナー(メッヒェレン)の神学校で下級聖品を受ける。彼はチブスで働けなくなった兄に代わって派遣団に加えてほしいと直接修道会本部に申請、許可される。
- 10月 ダミアン神父は巡礼船として知られるモンテプ(シユェルブンフェーベル)の聖母寺院で母と義妹に会い、最後の別れをする。
- 11月2日 ブレーマー・ハーベンで乗船。一行は16人の宣教師と16人の水夫、それに船長夫婦とその従兄弟の合計35人。船は3木マストの蒸船、ウッド号(R.W. Wood)でハワイ王座を襲っていた。途中、予定の寄港地はなかった。
- 1864年 3月19日 ハワイ群島が視界にはいる。マウイ島、モロカイ島の沖を過ぎてオアフ島へ。午後9時にダイヤモンドヘッドを回り、ホノルルに着いたのは夜中、ヨーロッパの港を出てから138日間の航海であった。上陸は翌20日になったようだ。